

重金属汚染土対策を充実

「吸着層」や「不溶化」展開

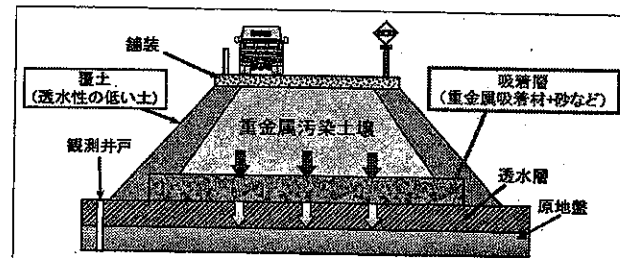
NIPPO

NIPPOは、重金属で汚染された土壌浄化の取り組みを強化する。4月から改正土壌汚染対策法が施行となり、汚染拡散が懸念される場外搬出による浄化方法から、今後は現地でのオンサイト処理が主流になると予測。これに対応して土壌に汚染されたトンネルを盛り土に利用する際、底面に汚染を吸着する層を形成する工法を展開するほか、特定有害物質汚染に対して各種の「不溶化材」を混合して溶出量を抑制する工法でも材料の充実を図る。油系汚染を中心に累計700件を超える土壌修復工事の実績がある同社は、重金属汚染の浄化策を充実させ、「カソリンスタンド跡地から大規模な宅地開発に至る幅広い案件に対応していく」（羽山高義環境事業部長）考えだ。

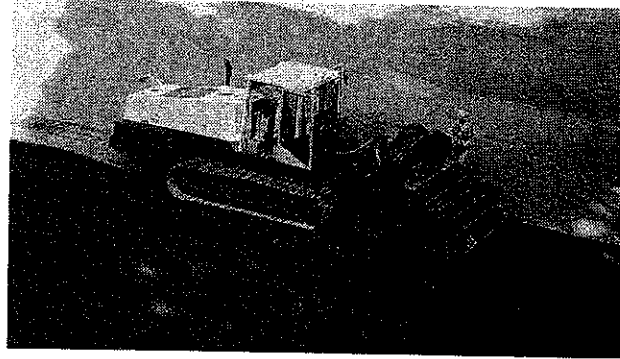
油系とあわせ幅広い案件に対応

トンネル掘削に伴って発生する土系で汚染された土を盛り土に利用するケースでは、ソフィア（東京都豊島区、池田穂高社長）が開発した吸着材「シュベファイバー」を利用。これを砂と攪拌して30秒程度の吸着層をつくり、その上に汚染土壌を利用した盛り土を形成する。盛りの土の上部はアスファルト舗装、のり面は透水性の低い材料で覆土。これにより、盛り土内部の吸着層は、同社が軟弱地盤対策などに利用しているスタビライザー（攪拌・混合機）を用いて形成し、その後タイヤローラーで転圧する。汚染濃度に応じてシュベファイバーを添加することから、材工込みで1立方メートルあたり3000～5000円の低コストで対策工事が行えるほか、仮置きヤードが必要な

く、従来の対策法に比べ工期短縮が図れるのも特色。同社は、グループ会社の大日本土木とタイアップするなどして、汚染された土を有効活用した対策に取り組む。一方、不溶化工法では、汚染土壌を採取して行う事前の「トリートメント試験」を経て、適切な不溶化材を選定。ソフィアと提携している強みを發揮して、環境に優しい鉱物系や、薬剤、固化と充実させて、対策事業を展開していく。迅速に重金属が分析できる試験装置も取りそろえており、きめ細かい施工管理に役立て、「手戻りのない、効率的な事業展開に役立っている」（環境事業部）という。



吸着層工法の概要



スタビライザーでシュベファイバーと砂を攪拌・混合

日刊建設工業新聞
平成22年3月3日掲載